

レポート

# ボランティアでつながる人々のこころ ～伊豆大島土砂災害ボランティア

太田杏奈



## ■ボランティアとの出会い

2013年10月16日、台風26号が伊豆大島に上陸し、土砂災害により重大な被害をもたらした。私は歯科衛生科の学生で、翌年に控えた国家試験のに追われる毎日を過ごしていた。

2011年の東日本大震災をきっかけに始まった、宮城県気仙沼市での、学習支援ボランティア「学びーば」(\*)に参加してからは、宮城県気仙沼市を何度も訪れている。

それ以降、各地で災害が発生すると他人事とは思えず、「自分にも何かできないか」という気持ちになっていた。伊豆大島で発災したとき、鶴見大学歯学部OBの植草康浩先生の勧めがきっかけで、ボランティアに参加することになった。大学関係者や周囲の人々からたくさん支援やアドバイスがあり、身が引き締まる想いでいた。

## ■伊豆大島に訪れて

災害発生から約1ヶ月後の11月23日早朝、フェリーで伊豆大島の岡田港に到着した。良く晴れた穏やかな日で、富士山がきれいに見えた。大学ボランティアチームからは4名で、旅

行会社企画のボランティアツアーの一員として参加した。ツアー参加者は19名で、年齢も職業も様々だ。神戸から参加している人もいた。船を降りてからバスに向かうまで、バックパックを背負い荷物は重たかったが、これから活動のことを考えると力が湧いてきた。

伊豆大島は周囲52キロメートル、人口約8千人。中心部に三原山という標高758メートルの火口丘があり、沿岸部まで斜面が続いている。被害を受けた大島町元町地区は、島の西側に位置する。台風26号により24時間で800ミリを超える雨が降り、土砂崩れが発生した。都会で降れば、地下鉄が埋没する恐れがあるほどの豪雨であったそうだ。土砂崩れは三原山の標高250メートル付近から始まり、沿岸部まで被害は長さ2キロに及んだ。私たちが宿泊するホテルはそこから歩いて数分ほどのところだった。

朝食を取ってから大島町の社会福祉協議会へ向かうと、長靴や防塵マスクを身に着けた人々が集まり始めていた。週末ということもあり普段より人が多く、島内外から約400名の参加者がいたそうだ。

社会福祉協議会の建物の外は、受付や資材置き場、休憩や差し入れのエリアなどに分かれていた。ボランティアからの応援メッセージボードが置かれた脇には差し入れのエリアがあり、地元の婦人会の方々が昼食の準備をしていた。

ボランティアの人数の多さに圧倒されると、ホワイトボードが目に入った。そこには活動場所、作業内容、必要な人数が書かれており、「マッチング」という作業で大勢のボランティアを振り分けていく。ボランティアと地域の人々をつなぐボランティアコーディネーターの重要性について気付かされた。私たちボランティアツアーハーは1つのグループとして登録され、活動内容が決まっていた。朝のミーティングで説明を受けてから、活動場所に向かった。

## ■民宿での土砂出し

そこは高齢のご夫妻が経営する小さな民宿だった。近くに海水浴場があり、夏には観光客などで賑わうそうだ。土砂は駐車場脇の松林によりせき止められたが、建物は床上浸水で営業できない状態になった。当初は「出来ることは自分で」と考え、家族で片付け始めたそうだが、家族が腰を痛めてしまったため、ボランティアにお願いすることにしたという。

私たちは駐車場や松林のなかの土砂のかき出しを行った。既に何度かボランティアが入っていたため、一見すると片付いている印象だったが、作業を始めると10~20センチくらいの柔らかい土砂の層が堆積しているのがわかった。松林の中は大きな器材が入らないので、手や小さな鍬などで土砂を取り除いていく。地道な作業だが予想以上に重労働だ。11月にも関わらず日差しが強く暖かい日で汗ばむくらいだった。鍬で土砂を崩す人、スコップですくつて手押し車に載せる人、それを運ぶ人というように、役割に分かれて作業を進めた。

グループメンバーはほとんどが初対面であったが、チームワークは抜群だった。それぞれが声を掛け合いながら、同じ作業で疲れたら役割を交代したり、休憩したりしながら、作業を順調に進めることができた。みんな「自分にできることをしたい」という思いで集まった仲間だ。同じ目的のもとで自ら進んで動くことができるメンバーとの作業は爽やかだ。

休憩時間に海水浴場に行った。そこは土砂が流れてきた川の河口に位置する。更衣室らしき建物は崩れ、大きなクレーンの部品、石や流木などが散乱していた。辺りには木の根のようなものが多く散らばっていて、木が根こそぎ流れた様子が伝わった。次の海水浴シーズンまでに片付くだろうか。海底には土砂が50センチほど堆積し、ボートで通ることが出来なくなったそうだ。河口を覗くと川の中の土砂などはきれいに取り除かれていた。

上流の方を見上げると、二キロくらい彼方に山が見えたが、手のひらの形のように木がなくなっていた。土砂崩れが始まった付近だ。あんなに遠くから土砂が流れてきたのかと思うとぞつとしたが、それが現実に起きたことだ。川沿いを歩くと、土砂が道路から川の中に流れ込んだ形跡があった。川も道路も区別がつかないような状況だったのかもしれない。周辺には窓ガラスが割れた家、半壊した家、土砂や流木などに押し潰された車などがあった。

2年前の夏、気仙沼で見た光景を思い出した。まさに「陸津波」といわれる状況だった。

東日本大震災をきっかけにボランティアを始めてから、災害は他人事ではないことを実感してきた。被災した地域を訪れる度に、自分が被災したらどう感じるのだろうと考えてみる。しかし、本当の気持ちは地元の人々にしかわからないと思う。自分が生まれ育ち、長年住んでいる場所は、自分の居場所であり、大切な人が集まる所だ。元通りの地元の風景を取り戻すにはどれくらいの時間が掛かるのだろうか。災害がどこで起きたとしても、その規模に関わらず、被災した地域や人々が置かれている状況の過酷さに変わりはないように思えた。

午前の作業を終え、昼食のため社会福祉協議会に戻ると、ボランティアに対する支援の多さに驚いた。私たちは昼食を持参していたが、地元の婦人会の方が作った豚汁や天ぷら、様々なお菓子、飲み物、うがい薬やタオルに及ぶまで、差し入れが溢れるほどにあった。ボランティアをしに来たのに、こんなにたくさんの支援をいただいてよいものか、恐縮してしまった。

十分にエネルギーを補充し、午後の作業も順調に進んだ。作業が終えると、松林の中はすっかりきれいになった。一人ひとりの力は小さなものだが、大勢で協力すれば大きな力になる。民宿のおばあさんも喜んでくれた。少しでも助けになることができた、という満足感や達成感で満たされ、一日の疲れが吹き飛ぶような気がした。

## ■さまざまボランティアの形

2日目は元町神達地区にあるホテル椿園での作業を割り当てられた。伊豆大島では毎年「椿まつり」が開かれるほど椿が有名だ。ホテル椿園周辺にもたくさんの椿の木があった。

椿の木がトンネルのように茂る小道を抜けて行くと、目の前の景色が開けた。そこは土砂崩れの被害が最も大きい場所で、見渡す山の斜面一帯が更地のようになっていた。昨日、海水浴場から遠くに見えた手のひらの形のよう木々がなくなつた部分が目前に見えた。土台だけになった家には花が手向けられている。ホテル椿園はそのすぐそばにあった。建物はぎりぎり倒壊は免れたものの、床上浸水の被害に遭つたそうだ。

被害の範囲が広いため、周りには大勢のボランティアがいた。グループ毎に活動エリアが振り分けられ、私たちはホテルの正面入り口前の土砂出しを行うことになった。2日目なので作業に慣れてきて、作業のスピードが上がった。私たちはもとの状態を知らないので、土砂を掘る深さや、以前から植わっていた木と流木を見分けることが難しかった。わからないことがあれば、その都度仲間達と相談しながら作業を進めた。作業は午前中のみだったので、あっという間に終了した。仲間達とはすっかり仲良くなり、名残惜しい気持ちで作業を終えた。

今回のボランティア活動を通して、ボランティアにはさまざまなものがあることを学んだ。気仙沼市で継続活動している「学びーば」は、自分たちで企画、準備、運営などを行う長期的な活動である。一方で伊豆大島でのボランティアは、発災直後に必要とされる短期的な活動であった。土砂災害による大量の土砂の片付けや清掃など、たくさんのマンパワーが必要となる。私は普段「学びーば」の活動に慣れているので、長期的な活動の重要性ばかりに気を取っていた。しかし、短期的なものも、長期的なものも、性質が異なるだけで、どちらも必要とされるものであることに気が付いた。

## ■地元の方とのふれあい

昼食時には、社会福祉協議会の地元のスタッフの方が豚汁を届けてくれた。お札を言うと「ボランティアの方が来てくれて助かります」と笑顔で答えてくれた。ボランティア活動に参加すると、地元の方とふれ合う機会があることがうれしい。島には猫が多く、休憩していると足にまとわりついてくる。

帰り道では、地元の80代の女性二人に会った。二人は小学校の同級生だそうだ。一人の方は車を運転されるそうで、車で一緒に買い物に行った帰りだという。私たちはボランティアをしに来たと伝えると、大島民謡を歌って歓迎してくれた。しっかりとした歌声で聞き惚れてしまった。長年踊りを習っていたそうで、今でも足が挙がるとやって見せてくれた。「また今度伊豆大島に来てくれたら、ジュースでも出してあげる」と言ってくれ、握手して別れた。元気なおばあさんと話すことができて、私たちも元気をもらえた。

ボランティアに参加すると、いつも思うことがある。「誰かを助けたい」と思って来たはずなのに、結局助けられているのは自分たちのほうなのだ。地元の人の笑顔に触れて自分も笑顔になったり、仲間と協力して助けたり助けられたりする。誰だって一人では生きていけ

ないのだが、日々の生活に追われていると、大切なことを忘れてしまう。

普段からの付き合いがないと、いざ災害があったときに助け合おうと思っても難しい部分があると思う。日頃から周囲との付き合いを大切にしていきたいと思った。

たった二日であったけれども、伊豆大島での活動を通して、さまざまなことを学んだ。帰りのフェリーで海を眺めていると、大島がどんどん遠ざかっていく。夕日が素晴らしい美しかった。夕日で空が赤く染まっていくように、私の心も温かい気持ちで満たされるようだった。

\* 鶴見大学が行う学習交流活動。気仙沼市の小学校で、学習を通して子どもたちと交流している（震災が残したもの14 177 p～186 p 参照）。